

温古知新⑥ 東海道四谷怪談 1

笑顔礼讃西東

川柳会・新樹様(千葉県・松戸市) 2~3

月の匣俳句会様(東京都・江東区) 3~4

小林勝様(神奈川県・横浜市) 5

投稿作品 6~10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(夏を感じる瞬間は?) 11~12

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 山形誠司様 14

新潟ぶらり／今代司酒造株式会社／西大畑公園 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人森賀まり様 16

8 August Vol.51

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース

夏 楽

夏です。「暑くて耐えられない！」なんて方もいらつしやるのでは？今回は、そんな方にオススメの、日本の怪談をご紹介します…。

「四谷怪談」は、元禄時代に起きたとされる事件を元に創作された日本の怪談で、有名なのは鶴屋南北作の「東海道四谷怪談」ではないでしょうか？

元禄時代に実際に起きたとされるお岩伝説に、不倫の男女が戸板に釘付けされ神田川に流されたという当時の話題や、砂村隠亡堀に心中者の死体が流れ着いたという話などが取り入れられました。

そのあらすじは…。

元塩冶藩士、四谷左門の娘・岩は、夫である民谷伊右衛門の不行状を理由に実家に連れ戻されてしまいました。伊右衛門は左門に復縁を迫りますが、過去の悪事を指摘され左門を殺害。同じ場所で、岩の妹・袖に横恋慕していた葉売り・直助は、袖の夫・佐藤与茂七(実は別人)を殺害していたのです。ちよどとてへ岩と袖がやってきて、左門と与茂七の死体を見つめます。嘆く二人を伊右衛門と直助は仇を討つてやると言いくるめ、伊右衛門と岩は復縁。直助と袖は同居することになります。

民谷家に戻った岩は産後の肥立ちが悪く病がちになったため、伊右衛門は岩を厭うようになりま。高師直の家臣伊藤喜兵衛の孫・梅は伊右衛門に恋をし、喜兵衛も伊右衛門を婿に望みました。高家への仕官を条件に承諾した伊右衛門は、按摩

温古知新⑥ 東海道四谷怪談

の宅悦を脅して岩と不義密通をはたらかせ、それを口実に離縁しようとする画策します。喜兵衛から贈られた薬のために容貌が崩れた岩を見て脅えた宅悦は伊右衛門の計画を暴露。岩は悶え苦しむ、宅悦ともみあう内に置いてあつた刀が首に刺さって死んでしまいました。伊右衛門は家宝の薬を盗んだ罪で捕らえていた小仏小平を惨殺。伊右衛門の手下は岩と小平の死体を戸板にくくりつけ、川に流してしまいます。

伊右衛門は伊藤家の婿に入りますが、婚礼の晩に幽霊を見て錯乱、梅と喜兵衛を殺害、逃亡。袖は宅悦に姉の死を知らされ、仇討ちを条件に直助に身を許しますが、そこへ死んだはずの与茂七が帰ってきます。結果として不貞をはたらいた袖はあえて与茂七、直助二人の手にかかり死んでしまいます。袖の最後の言葉から、直助は袖が実の妹だったことを知り自害。

蛇山の庵室で伊右衛門は岩の幽霊と鼠に苦しめられて狂乱します。そこへ真相を知った与茂七が来て、舅と義姉の敵である伊右衛門を討つたのです。

現代でも多くの映画や小説の題材としてとり上げられているので、そちらから入ってみるのもいいかもしれません。

暑くて寝苦しい夜に、いかが…？

(古川久美子)



川柳会・新樹

会長 山本由宇呆さま
(千葉県・松戸市)

東武野田線の逆井駅から、アスファルトの熱にゆらめきながら住宅街を歩くこと10分、柏市藤心近隣センターで行われている川柳会・新樹の句会にお邪魔して参りました。

川柳会・新樹は、平成6年に現講師の江畑哲男氏が柏陵高校で開催した川柳教室の1、2期生が中心となり、9年に「柏陵川柳会」として発足、13年に「川柳会・新樹」に改名し現在に至る。会員のほとんどは江畑氏が代表を務める「東葛川柳会」に属し、年数回の吟行会や勉強会など活発な活動を続け、本年10月には10周年記念合同句文集『新樹VI』の発行も予定されている。

午後12時50分には教室スタイルの研修室は8割方埋まり、皆さん宿題2題の各3句を短冊に記入している。提出が終わると事務連絡に続き、事前に1句ずつ提出している課題「固い」より、各人が特選1句、秀句2句、聞いてみたい句1句を上げる。

まずは本日の高得点句

11点 堅物の遺族走らす通夜の美女 正義

会長の山本由宇呆さんが進行と講評を挟みつつ、選んだ人を中心に感想を述べ合う。

堅物と思われていた旦那の通夜に



すごい美女が来て、遺族が走り回ったという図／最後に美女ときたところにドラマがある／作者が見えたので、今確認したら間違いなかった笑／平素堅いと思っていたご主人、遺族のあわてぶりを「走らす」としたところが面白い。

10点 哲学を論じ合ってる観覧車 みの里

今日は課題が「固い」だからか句も固く、川柳を探すのに苦労した。川柳らしいと思っていたのだいた／観覧車で句を作ったことはあるがこういう句は作ったことがない／アベックで哲学とは、あり得ないかもしれないが有り得るんだというところが面白い／哲学は時間をかけて論じる類のもの、観覧車に乗っている短時間の間に哲学を論じるのはおかしい、だからこの句は拾いかけてやめた。

9点 凍土掘る血マメの指にある思郷 信義

地面の固さと故郷を思う気持ち、そして帰り着くんだという意思の固さを感じた／シベリア抑留、戦争体験がないと作れない／抑留経験者で

はないが、辛い仕事で亡くなる仲間を埋葬するために手でも掘って埋めたという話を聞いたことがある／「思郷」は最初造語かと思ったが辞書にある、ただ故郷を思う言葉としてどうか？／でも望郷だと4語になる。

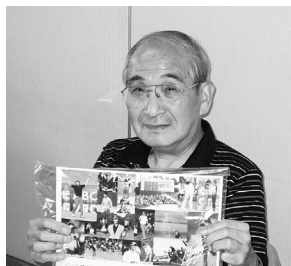
8点 不祥事に固い土俵が崩れてる 明
相撲界の野球賭博問題、固い土俵が崩れるというところがいい／土俵を作る際は、にがりの入った水を撒いてひっぱたいて固めて作られる／土俵が固いとわかっていたら、固いと言わなくていいのでは？／同感、違う言葉で言うべき／「崩れてる」はいかにも素人っぽい。「崩れ出す」とか？

7点 思い切り生きた証の鉄餅肌 桃葉

剪定の鉄？長い間使い続け一生懸命に仕事してきた人の鉄餅肌／固いという鉄や石が思い浮かぶが、人間の中に固いものがあつたという見つけ／漢字が読めなかったから採れなかった(笑)、読めないほうが悪いといえよそれまでだがパツと読んですぐにわかるのがいい句では？／字のために損をすることもあつた／この人は庭師？／庭師なら両手で持つ大



▲身振り手振りを交えて解説する会長の山本さん



▶景品を手にする本日の高得点者 正義さん

(笑)

つながらない／今辞書調べたら石頭 Ⅱ「教えてもなかなかわからぬ人」とある、そういう人が解っても知らない人とはおかしいんじゃない？

きな枝切り鋏では？／作者は？／桃葉です。餅肌の字、全部書いてみたがひらがなはまずだめ、カタカナと随分迷ったが漢字がふさわしかった／桃葉さんのモデルは誰？／モデルは私笑)／洋裁用の裁ち鋏です／謎がとけましたね。

6点 強豪へ向かうがちりした絆 茂枝
W杯で日本が一試合ごとにチームワークが固くなった／新しい題材で時事性がある／強豪に対し守備がちりとし、点を阻止した。

5点 新調の背広が固い新市長 喜久雄
松戸の新市長、前回落ちてこの度当選、素人っぽいといういしさが表現されている／新調の背広だから固い、新任だから緊張で固いがダブルで効いている。

5点 結び目は引き合うほどに固くなり 今日民
今読み返すと当たり前といえは当たり前(笑)／両方がひっぱり合わないと固くならない。

5点 解つても知らぬ振りする石頭 敏郎
逆に知らないのに知ったふりをするクチ(笑)、だから私にしかわからない選び方／「石頭」と、「解つても知らぬ振りする」が、



東西讃礼顔笑

その後は、2人選で宿題2題(各3句提出)の中より各選者が20句と天地人の3句を選ぶ。

「じめじめ」

ゲスト選者 一江選 今日民選

失恋の涙ハンカチだけが知り 恵子

女房の愚痴降り止まぬ低気圧 正義

なめくじが床のリフォーム決意させ 尚男

不景気と梅雨で論吉にカビが生え 差策

雨粒がしたたる豪雨禍の画面 信彰

一江選

天 箒目の砂が乾かぬ名古屋場所 喜久雄

地 空つぼの牛舎涙で濡れたまま 喜久雄

人 除湿器の中に夫が吸い込まれ 今日民

軸吟 高温多湿夏への通過儀礼です 今日民選

天 からぼの牛舎涙で濡れたまま 喜久雄

地 リストラの話が濡らす縄のれん 定一

人 三日目の雨を楽しむカタツムリ サヨ子

「サッカー」 サヨ子選 喜久雄選

P.Kを外した友を抱く仲間 伸男

サッカーの覇者に男のロマン見る 桃葉

サッカーの話し商談けつとばす 恵子

パウロ君国旗の赤が好きらしい 信彰

サッカーの後もブブゼラ耳につき 玉枝

ブブゼラか耳鳴りなのかW杯 明

脳みそもフルに使ってヘッドイング 敏郎

サヨ子選

天 P.Kの神のみぞ知る運不運 明

地 キックオフ夢見る子等にある未来 喜久雄

人 アフリカへ夢を与えたW杯 みの里

軸吟 地球丸ごとサッカーに燃えて夏 喜久雄選

天 サッカーの恋少年は蹴りまくる 桃葉

地 スペインが国寶とするパウロ君 明

人 サッカーで景気も上げた勝利国 玉枝

軸吟 サッカーに破れドラマが動き出す

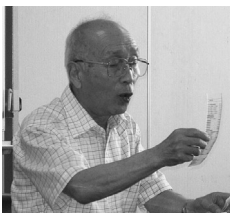
■質問コーナーでは「それはおかしいんじゃない？」と積極的に質疑応答がなされ、録音をして家で聞き直すという方もいらして、勉強熱心な会という印象。元大学の物理の教授あり、石川達ちゃんと家族ぐるみのお付き合いをしている元隣人あり、先日モンゴルから帰ってきた、はたまたあちらの全国大会に行ったり、皆さんの旺盛な活動ぶりに圧倒される。帰りがけに「一緒にさせていただいたゲスト選者、一江さんの「新樹のメンバーは一生懸命、だからほとんど伸びていません」の発言が、「行動こそ真実」という言葉を裏付けていた。(木戸敦子)



「サッカー」二人選の選者サヨ子さん



「じめじめ」二人選の選者一江さん



「サッカー」二人選の選者喜久雄さん

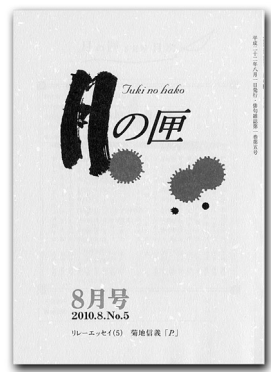


「じめじめ」二人選の今日民さん

月の匣俳句会

主宰 水内慶太さま (東京都・江東区)

成田空港まで36分という「成田スカイアクセス線」が7月17日に開業したばかりの日暮里駅。北口を出て坂を上ること1分、ここに「雪月花」の景勝の地として名高い「雪見寺」(浄光寺)・「花見寺」(修正院、青雲寺)と並び称された通称「月見寺」、本行寺がある。江戸城を築城した太田道灌の孫・太田資高の開基によるこの由緒あるお寺で、毎月開催されている「月の匣」俳句会にお邪魔して参りました。



▲創刊号よりお手伝いさせていただいている月刊「月の匣」最新号

本年4月に創刊し、まだ4カ月余という湯気の立つような新生「月の匣」。主宰の水内さんを中心に、当日も28名の老若男女が2階の大広間にぎっしりと詰め、活況を呈している模様。本日は、雑誌5句+兼題「五月雨」1句の計6句提出、各人8句選のうち1句を特選に選びます。

では、主宰の特選3句から――。



▲お仕事も現役、精力的に活動される水内主宰

一瀑を吊し十七音の宙 恭子

スケールの大きさに魅かれた。いつか大きな滝が吊されているような句を17音の中に作りたい。俳句はまず自分で見た滝を吊し、その中で空を広げたり、滝を大きくしたりいかようにもできる。組板の上に滝を載せて作ったような句で、かつリズムがよく俳味がある、さすが恭子さん(笑)。「一瀑を吊し」でもうできあがっている句。「十七音の宙」がおもしろい。

主宰：滝以外でも何を見ても俳人ならそこに17音が潜んでいるとみる。その潜んでいるものを引きずり出して途中経過を句にしたという実におもしろい作品で、共感者が多いのもこの句の素晴らしいところ。

見開や五月雨の景死後の景 喜翔

主宰：五月雨は梅雨だからなかなか止まない。そのぐじゅぐじゅしたところが「死後の景」という見立て。見開きの右側に五月雨の景、左側に死後の景、単純明快なデザインがこの句のおもしろいところ。

頬杖は妣に会ふ杖蚊遣り香 恭子

頬杖をつくのは何となく物想いをすると、その杖が亡くなったお母様



▲庭には一茶、山頭火の句碑がある本行寺



に通じる杖だと／蚊遣り香という季語がピタッと効いて何とも言えない抒情が素晴らしい／蚊遣り香が亡くなったお母さんに会うという心持ちを引き立たせてくれる。

主宰：俳句形式をとりながらも「疵に会ふ杖」と断定しているところがこの句を強くしている。それを受けて立つ蚊遣りの煙が母を思慕している想いをうまく表現している。

以下、秀逸より抜粋

先着の百人さままでさみだるる 滋乃
主宰：スーパーパーのチラシで「先着100人様まで」というフレーズを見かけるが、普段の生活の一コマが俳句になるという好例。五月雨で句を作るとイメージ的に古くなりがちだが、現在をポツともってきたところがいい。滋乃さん、みんな採ってくれなかったけどいい句です(笑)。

虹の出てわが脛疵の時効告ぐ 夏緒

主宰：作者が齧った傷なんだろうな。その時効が過ぎたということも虹が教えてくれた、後悔なのか軽い何かを感じている、詩人らしい句。

そこばくの風を掴みて蟬生る 勇

この句には参った。生まれた瞬間を詠っているが、蟬が出てきたその形まで目に浮かばせてくれる。「そこばくの風を掴みて」に魅かれた／どこからきてどこへいくのか、命の由来と命への讃歌に感動した。

浅間尾根園地便所虎耳草 鳴太

主宰：遊び場がありそこに便所がある、その下に虎耳草(ユキノシタ)がある、それを全部漢字で書けたところが一つの俳味として遊べたんで



▲見目麗しい女性陣が多いのも特筆に値!

しょうね(笑)。

◎今日の最高句

ひたひたと鉄鎖の如き蟻の列 葎夫

「鉄鎖の如き」という比喩と「ひたひた」の擬態語がいい。

主宰：山口誓子に蟻の句が多くあるが、即物的な「鉄鎖の如き蟻の列」という認め方が素晴らしい。ひたひたと言わないと鉄鎖が細く見えるので、ひたひたも効いている。

里の道日の斑風の斑麦の秋

しづか
主宰：これを3段切れ5段切れだからNGというも蓋もない。切れちやダメということではなく、切れは1箇所の方が得、そうじゃないと損ですよという話。これは助詞を使わず全部名詞で4つに切れているが意味的につながっている。切れが多くてもリズム感で成功している句。この句を採らなかつた人も後で声に出して読むと、よさがわかる。声を出して読むことが大事。母音の問題もあるので、意図して作ってもそうはならない句。

一禽を侍らす大河雲の峰 伊佐男

主宰：大きい景でリズム感もいい。雲の峰があり、川が流れ、鳥がいる、という景を「一禽を侍らす大河」という捉え方で一気に詠み下ろしたという感じがいい。



▲句会終了後からがまた本番

○秀逸

遠蛙里ごころとは母性かな 好江
イグアスの瀧の果の微塵なす 一行
海の気を吸ひ豊かなる瓜の花 写路
黄泉の扉の何処にもある木下闇 一行

さみだるることもをんなの武器のうち 夏緒
紙魚はしる考の聖書は文語体 加奈
いくさ無き国でんたうむしだまし 勇
細胞に異端児のあり十葉咲く 照子
横丁に「どせう」とありし著我の花 滋乃

○主宰句

灯さず酌まず山気の涼を汲む
詩歴まだ五指にて余る今年竹

■欠席投句の作品も含め176すべての句にあたること4時間半。その懇切さは時計係の方も気を揉むほど。「この句のすばらしいところは」と作品の美点を褒め、「どういう意味?」と確認しては「それならこう詠えばいい」と的確にアドバイスをする。それでも足りないという熱心に、魅かれる方も多しはず。ぐんぐん伸びどんどん広がる今年竹を培う、その地熱を感じる会でした。(木戸敦子)



東 西 讚 禮 顔 笑

小林勝さま

(神奈川県 横浜市)



カメラを向けるとにこやかなお顔がとたんにキリッと。先生の片鱗が垣間見えました

本漏れ日が力を強くする6月の日比谷公園。5月に『小林勝歌集 アンダンテ』を上梓された小林勝さまに、お話を伺いました。

午後から奥さまと講演会に行かれるというお時間のない中、それでも公園内のテラスでゆったりとまずは、幼少期のお話から。

■ご出身は山梨ということですが
女3人男2人、5人兄弟の下から2番目で、母はよく「じくなし(甲州弁で根性に欠ける者)」といつて私の行く末を案じていた。わずかな土地しか持たない農家だった父は行商で生計を立て、子どもには違う暮らしをしてほしかったのか教育には熱心だった。先に東京の大学に行った兄が夏休みに帰省すると「田舎と違って東京の受験生は四当五落で頑張っているぞ」とおどかさされ、高校中でみんな寝なきやいと思つて眠らない競争をしたり(笑)。無事、東京教育大学(現筑波大学)に入学したが、奨学金以外はほぼ自分で捻出していたため家庭教師のダブルヘッダーなんてこともやって

いた。その分勉強はしなかったですね。■卒業後はそのまま東京に？

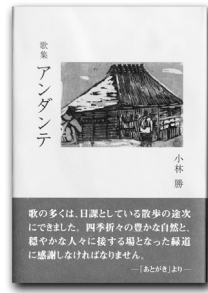
国語の教師として、最初は嘉悦女子中学高等学校、その後はソニー学園高校(現湘北短期大学)、最後は明星高校の20年。現場が好きで、手応えを感じながらやってきたが、60歳を過ぎると生徒とのコミュニケーションが取りづらくなることを感じていた。なるべく生徒を自由にさせたかったが、現場ではそうもいかない。その時の苦悩、ジレンマを詠んだ歌もある。悩んだ末、定年以前に辞めた。その後は、ついこの前まで7年間、かつて設立の際にお手伝いした幼稚園で、週2日園児に絵本の読み聞かせをしていた。楽しかったですよ。

■短歌は先生時代から？

30代半ばから職場の同僚の影響で短歌を始め、日記代わりに作っていた。投稿もせず、人の評価も不要、自分としての一首ができればそれで満足だった。連日作っていたのは最初の短期間で、あとは忙しく歌を作る余裕もない日々。長い中断を経て、その友人が中心になって1998年に創刊した「月虹」という雑誌に投稿するようになり、30代前半から60代後半までの長きにわたる作品を第一歌集『分水嶺』としてまとめた。

■今回の歌集は？

特に感慨もなく70歳を迎えたが、高校の同級生の1割にあたる50人近くが



▲歌集『アンダンテ』
若い時の版装丁と好評

亡くなっており、自分なりに毎日を大切に丁寧に生きなければと思いはじめた。父の亡くなった歳を越え両親のことを思い出すことも増え、自分が今をどう生きているのか、何らかの形でまとめて報告したいというような気持ちになった。そんな時、酒席を共にすることも多く、短歌の先達でもある友人に「2年間だけ歌をつくることに集中してみようかと思つている」と打ち明けた。

■ただ飲んでいるだけじゃないんですね

少しは実のある話をしないと(笑)。「やつてみたら」と背中を押され、2年を終えたときには千首を超え、歌集にまとめた方がいいかなあと。歌そのものに全く自信はないし、私みたいな素人が歌集を2冊も出すなんて暴挙だが、友人が解説を書いてくれ何とか形にできた。

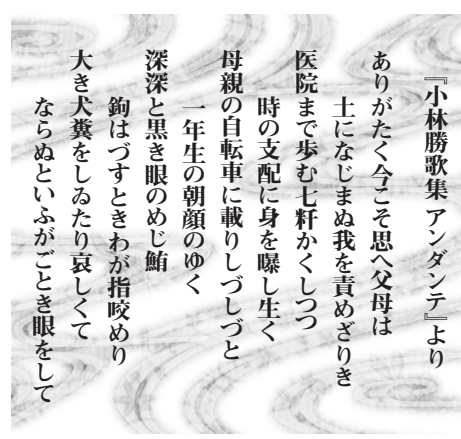
■どのようなときに歌を？

朝食を終えると1時間半くらいかけて緑道を散歩する。15分くらい歩いてるうちに気分もすっきり入れ替わり、いやなことは忘れて、思いがけないことが湧いてきたりする。緑道で会う人は会釈したり挨拶したりと、みんな穏やかで、心がなごむ。1首のこともあるが3〜4首のこともあるが、散歩中に歌ができたときは足取りも軽く、気分良く帰途につく。

■これからも歌を？

多くの歌は親や連れ合いの死や病気などドラマがあるが、幸か不幸か私にはドラマらしいドラマのない2年間で、日常の些事を題材にするしかない。そのうち詠う材料がなくなるんじゃないかと不安になるが、友人は「材料はいくらでもある」とまた励ましてくれる。

「何であんなつまらないことを歌にするんだ」という同級生もいるが、私の道楽だから仕方がない(笑)。それともう一つ、歳を重ねると脂汗の出るような忘れたい思い出もある。歌に集中すればそういう思い出から逃れられる。逃げずに向き合つて詠めば、むしろ迫力のあの歌ができるでしょうが、私にはその覚悟はない。「じくなし」なんです。だから身近な現実をじつと見て「筍が生えた」なんて歌を詠んでいたのでしょね。これからもそんなふうに自然に歌を詠んでいきたい。



『小林勝歌集アンダンテ』より
ありがたく今こそ思へ父母は
土になじまぬ我を責めざりき
病院まで歩む七軒かくしつ
時の支配に身を曝し生く
母親の自転車に乗りしづしづと
一年生の朝顔のゆく
深深と黒き眼のめじ鮎
鉤はずすときわが指咬めり
大き犬糞をしるたり哀しくて
ならぬといふがごとき眼をして

★音楽用語で「歩く速さで」という意味を持つ歌集表題の『アンダンテ』。歌の多くは、散歩の途次にできたという緑道の竹まい同様、終始穏やかで諭すようにお話くださる小林さん。ゆるやかな歩く速さで日常の風景や出来事があるがままに見、ご自身の言葉で切り取る。「ほんと何のドラマもないつまらない歌ですから」と謙遜されるが、それをできることこそが年輪を重ねた深みと豊かさの表れであろう。(木戸敦子)

投稿作品

※今月も、みなさまから沢山のすばらしい作品を投稿していただきました！
 今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。
 次回掲載分は9月15日(水)締切です。

俳句

- 1 時計のごとくきざみこむ人生かな
浅沼洋子(神奈川県)
- 2 妻と来てそれぞれ賞でし薔薇の花
高橋透(兵庫県)
- 3 笠に書く晴耕雨読梅雨に入る
大橋恒次(新潟県)
- 4 薫風や子に逆らはず従はず
井原毬子(東京都)
- 5 鳴き竜の声融入りぬ夏木立
星野三興(新潟県)
- 6 サングラスして悪役になります
吉田未灰(群馬県)
- 7 ホタル火のもつれて闇深まりて
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 8 植ゑし田のみなざる水の匂ひかな
松嶋光秋(東京都)
- 9 湯治湯に青く崩せる夏の山
千代田栄次(東京都)
- 10 観相に呼び止められて夏の昼
星一子(神奈川県)
- 11 すかんぼや幼馴染みの長電話
小岩和子(宮城県)
- 12 頑丈なコップがよろし砂糖水
小島岳青(新潟県)
- 13 担ぎ手の吾が娘眩しき三社祭
有坂馨園(福島県)
- 14 冷麦の紅の一筋無用の用
三木宗一(東京都)
- 15 鍬洗ひ春めく利根をまた濁す
坂本正夫(千葉県)
- 16 母の日に創作舞踊をプレゼント
忍正志(兵庫県)
- 17 つゆ明けの予定書き込む梅雨の入り
三津木俊幸(千葉県)
- 18 同期会想いを秘めてビール干す
大場きよし(宮城県)
- 19 夏空に飛立つ鳩のうつろかな
浜田蛙城(静岡県)
- 20 川の面の灯りて祭来たりけり
大谷茂(埼玉県)
- 21 青葉光葉擦れの森を貫けり
油谷郷史(兵庫県)
- 22 山もみじ故郷ゆきの二人づれ
河合ヤスエ(大阪府)
- 23 一握の恙の母の髪洗ふ
佐野和彦(静岡県)
- 24 諳んじて今も忘れぬ虹の色
井上静夫(栃木県)
- 25 更衣一度はセルを着る私
佐野しづ子(愛知県)
- 26 父性なく父の座守る夕端居
浦橋渴雪(兵庫県)
- 27 黒南風や西山隠す雲早し
谷野秀子(奈良県)
- 28 薔薇の雨しまひ忘れし首飾り
小林七重(新潟県)
- 29 色も香も棄てて薔薇は朽ちて散る
辻升人(東京都)
- 30 夕焼に眼下見わたすゴビ砂漠
中川平治(東京都)
- 31 波引きて磯の香がなつかしき
須澤重雄(長野県)
- 32 淡彩のバステルの花立葵
居原田連星(大阪府)
- 33 新緑の香にリラの香の相寄らず
梶鴻風(北海道)
- 34 教え子と打ち合う五月のテニスカ
布目雅之(埼玉県)
- 35 青葉木菟母に詫びたきこと多し
吉村筑紫(埼玉県)
- 36 色紙には村情山趣遠蛙
津田忠彦(岡山県)
- 37 手の甲に「あした夏服」下校の子
坪田勝秀(鹿児島県)
- 38 三極咲く花の三つを過たず
湯浅芳郎(岡山県)
- 39 午前四時夢さましゆくほととぎす
千葉すむ(宮城県)
- 40 走つてゐるまだ走つてゐる羽抜どり
石井美智子(埼玉県)
- 41 雨あとの彩^{いろ}冴え冴えと柿若葉
井口武重(新潟県)
- 42 苦勞など知らぬがよろし涼しき子
鈴木岑夫(千葉県)
- 43 句会果て戻る家路や初螢
清水喜代子(岡山県)
- 44 浅学の身には眩しき雲の峰
今井勝子(新潟県)
- 45 羊蹄^{よつてい}を仰ぎて含む岩清水
堀田寿美子(北海道)
- 46 ブブゼラにハラハラドキドキ夏の夜
半 山本直子(大阪府)
- 47 ボンボヤーレジュン君に青葉光
北嶋八重(京都府)
- 48 抱かれて触れたき母の暖^{ぬく}肌
伊藤修敬(三重県)
- 49 去年はまだ似合っているに白服の
村松知津子(大阪府)
- 50 日の恵み風のめぐみや若布干す
長尾俊彦(香川県)
- 51 百姓の顔を泛べて冬の風呂
寺岡文生(静岡県)
- 52 つばめの子無人駅舎の巢に育つ
中嶋清子(佐賀県)
- 53 ホータルは心に生きてふるさとや
佐伯セツ子(香川県)
- 54 西瓜食み腎臓氣遣ふ齡かな
渡邊昭雄(東京都)
- 55 ベランダに故郷の花夾竹桃
副島加代子(宮城県)
- 56 卯浪寄す神話の白兔風どころ
田中昶(鳥取県)
- 57 読み更ける探偵小説明け易し
磯村鉄夫(愛知県)
- 58 ひと足の先に打ち水かをりけり
藤本由美子(兵庫県)
- 59 うちわ風^{ちゅうわ}訥々話す戦の世
堀木和子(大阪府)
- 60 薔薇の中洞然として暮れなすむ
矢野絹枝(東京都)
- 61 故郷が湖底となる日朴の花
吉澤八千代(群馬県)
- 62 活けられて十葉の花真白なり
川崎洋吉(福岡県)

- 63 夏野行く少年蒼い眸もつ
阿部静子(北海道)
- 64 麦の穂のゆれる彼方に夕陽あり
中村和弘(愛知県)
- 65 空家にて五つ顔だす燕の子
杉村美保子(岩手県)
- 66 五能線海見ゆ刈田怒涛音
菊池シユン(青森県)
- 67 玫瑰や砂丘の夕日母と見し
竹本美美子(新潟県)
- 68 いとけなき風もありなむ夏の風
安木沢修風(新潟県)
- 69 大相撲大逆転息吹くや
五味田幸夫(栃木県)
- 70 郭公に送られ母の骨納
小林正男(新潟県)
- 71 にぎやかに鳥の来てをり桜の実
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 72 喫茶店こも満員街薄暮
藤沢樹村(東京都)
- 73 生ビール下戸の妻にもすすめ注ぐ
田島星景子(宮城県)
- 74 沖縄広島長崎汗みどろ
福岡悟(東京都)
- 75 夜目遠目ビル妍競ふ青田道
村木尚(新潟県)
- 76 ○×の認定試験小判草
高杉杜詩花(北海道)
- 77 昏れかねてこまこま零す柿の花
重原昇(新潟県)
- 78 郭公の一声空をわたりけり
山川みど利(山形県)
- 79 炎天の匂ひは母の背の匂ひ
寺尾令子(東京都)
- 80 麦が穂に殖えて涼しきイエスの目
諏訪杜夫(埼玉県)
- 81 アルバムに若い恋あり栗の花
長峰正晴(千葉県)
- 82 平凡の真ん中にゐる豆の飯
大窪美代子(大阪府)
- 83 しわしわと汐さす未明小葎切
関谷秀二(愛知県)
- 84 山宿の朝備長の火の涼し
川口襄(埼玉県)
- 85 雉子一羽鳴きつつ低く滑空す
津布久信雄(東京都)
- 86 迷ひ来し螢大きく灯しけり
阿部澄江(宮城県)
- 87 陽昇りて蟬の合唱汗にじむ
早川述史(愛知県)
- 88 万物の命のよすが山滴
阿部幸子(宮城県)
- 89 まいまいやをんなだてらにバイクと
石田福子(静岡県)
- 90 風鈴のせわしやチラシ撒きにいこ
奥田昌子(大阪府)
- 91 夏霧を抜ける人に道を問ふ
大藪新子(大阪府)
- 92 母の忌を終えて車窓は夕陽田
岡弘子(埼玉県)
- 93 並べたる母の好物盆支度
大久保アヤ子(東京都)
- 94 梅雨晴れて駆け出す子らの元氣よ
針生清(千葉県)
- 95 打水や風の揺ぎと日の匂ひ
羽根田明(神奈川県)
- 96 動かずも遠慮なき汗頬走り
谷川利子(愛知県)
- 97 梅雨晴れ間高層ビルの屏風立ち
望月よし江(埼玉県)
- 98 暑くても家族そろつて過ぎす夏
大橋絵代(千葉県)
- 99 瀧落ちて水の緊張解かれをり
内河邦久(東京都)
- 100 睡蓮の真昼閑寂あるばかり
岩村昇(神奈川県)
- 101 アーティチョーク魁偉に実り夏を咲
く
大井光隆(神奈川県)
- 102 しばらくは身を任せている青田風
勢川直美(大阪府)
- 103 ひと妻のけだるき仕草夕薄暮
本間七窪子(山形県)
- 104 ゆさゆさと八重芍薬の葉のひかり
駒場京子(神奈川県)
- 105 十葉や幕末志士の小さき墓
宮川昭男(高知県)
- 106 紫陽花寺鬼籍の友の胸に棲む
廣瀬喜代子(岡山県)
- 107 東風吹くや米百俵の休耕田
五十嵐勝敏(新潟県)
- 108 折り曲げて曲げて真菰の馬となる
浅倉里水(千葉県)
- 109 君の背にLOVEと書きあふる水着
かな
今井温子(奈良県)
- 110 橋あらば延命地藏桜ん坊
炭崎博(滋賀県)
- 111 一葉の住みし竜泉早梅雨
宇田川正雄(埼玉県)
- 112 達者かい友の声ありさくらんぼ
磯山陽吉(東京都)
- 113 頼朝の窟滴る山の水
檜山とり子(東京都)
- 114 好好爺孫の手をとり夏の河馬
北野耕兵(千葉県)
- 115 河童忌や河童の招く「ゆ」の暖簾
上谷すみゑ(神奈川県)
- 116 吹き抜ける青葉簾の五合庵
佐藤茂三郎(千葉県)
- 117 手を振つて小走りの子の夏帽子
小野寺裕子(宮城県)
- 118 晩節はプラス志向や桐の花
小田眞佐代(大阪府)
- 119 百咲いて百の散華や夏椿
針ヶ谷里三(東京都)
- 120 老々の介護の和み新茶酌む
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 121 牡丹の切手貼られて文の来る
秋谷静子(茨城県)
- 122 朝の街生命漲る夏木立
神作洗江(埼玉県)
- 123 風の声問ふ子の頬に若葉風
松木建二(東京都)
- 124 うちつれて田植体験二株つつ
林多み子(群馬県)
- 125 商いの座右の銘や麻のれん
岩永登茂子(大阪府)
- 126 鳩の群避けて銀杏踏んでいる
木下精(大阪府)
- 127 夏立ちて妹のメールの海蒼さ
堀井酔人(茨城県)
- 128 水無月の妙に明るい水こぼす
棚橋麗未(東京都)
- 129 街角に立てる僧侶や青時雨
齊藤安弘(神奈川県)
- 130 浅草や外人多し夏柳
福田和子(東京都)

投稿作品



- 131 裏店の一つ蛇口に銭葵
西川孝子(奈良県)
- 132 螢火や観て一献の誘ひあり
菅井文男(新潟県)
- 133 えごの花両手に受くる下校の子
小山たけし(埼玉県)
- 134 一人住みし義兄の通夜やほととき
清水伶一(神奈川県)
- 135 マイケルの余韻夏夜のスクリーン
村上千代(大阪府)
- 136 枇杷の実のつゆ滴りてすすり上ぐ
梅津陽子(千葉県)
- 137 日盛や伸び縮みする生命線
萬濃その子(千葉県)
- 138 ひんやりと水を掬えば月は掌に在り
吉野成行(愛知県)
- 139 揚げ花火山下清のまぼろしと
静野栄子(埼玉県)
- 140 冬の夜の綻び繕ふ妻なりし
能條憲夫(神奈川県)
- 141 あぢさゝみや言葉少き人が好き
山岸伊久雄(東京都)
- 142 菜の花やダビンの墓詣でけり
小林紀美子(東京都)
- 143 夕焼に硯の海の染まりけり
鈴木蝶次(宮城県)
- 144 梅雨明けや笑顔の並ぶ登校道
神一男(静岡県)
- 145 逝く牛に経唱えをる牛蛙
岡村君枝(茨城県)
- 146 聞く耳を持たぬ女の水中花
堀たかこ(大阪府)
- 147 退院の間近になりし七変化
鈴木与平(宮城県)
- 148 はや杜の一員なるや鴉の子
木村真澄(埼玉県)
- 149 故郷の話に及ぶ一夜酒
田中敏晴(奈良県)
- 150 星祭り老後の願ひ大文字に
大塚徳子(埼玉県)
- 151 紫陽花は雨好き洗はれ色濃くす
延原令岱(岡山県)
- 152 荒梅雨や涙というはあたたかき
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 153 からたちの刺を盾としかたつぶり
池本勇(大阪府)
- 154 江戸しぐさ知らぬ若者梅雨の傘
大阿久雅子(東京都)
- 155 夏あかとき地上に下りる翼かな
村上幸枝(大阪府)
- 156 天瓜粉鼻に一筋童の笑顔
藤田君江(東京都)
- 157 足しげく通ふ看護や蝉しぐれ
森崎榮久(岡山県)
- 158 雫ごと剪る紫陽花の重さかな
紺谷睡花(東京都)
- 159 子の声の空に広がるお花畑
高松ゆか(神奈川県)
- 160 改札をぬけて少女の夏帽子
増田信雄(埼玉県)
- 161 秋茄子の一つが郷愁誘ひけり
野別忠孝(埼玉県)
- 162 音もせで螢火闇にゆらゆらり
青木涼子(埼玉県)
- 163 暑さ蛇嫌い口々農体験
伊藤梅子(岩手県)
- 164 粽結う柱のきずを眺めつつ
大下志峰(福井県)
- 165 石仏の眠りを覚ます濃紫陽花
藤田照代(岡山県)
- 166 虎鶉野天に長湯してをりぬ
吉澤昌美(長野県)
- 167 一匹の螢ふと舞う母の部屋
要俊江(福岡県)
- 168 歌舞伎座閉場幟に夕焼泳がせる
池田岬(埼玉県)
- 169 参道の風と戯る炭風鈴
増本和子(千葉県)
- 170 戻る子と川の字作る夏蒲団
石川郁子(埼玉県)
- 171 愛しの木枯れて京まで沙羅の花
中山日出子(大阪府)
- 172 大いなる浮子を引き込み青葉潮
佐藤信(神奈川県)
- 173 石垣の汝も過客や蝸牛
関口修一(群馬県)
- 174 日傘して三四郎池一めぐり
古谷力(東京都)
- 175 仰ぐたび想ふ人あり合歓の花
中野博夫(埼玉県)
- 176 東京が背伸びしてゐる夏化粧
新井竜才(埼玉県)
- 177 店先のかめのめだかも楽しそう
高松愛(神奈川県)
- 178 蓮池に母の来そうな夜の帷
柴田恵美子(北海道)
- 179 あいさつを遠くしたよな三尺寝
橋本まこと(栃木県)
- 180 晴れの白曇りの白や手鞠花
三浦八千代(千葉県)
- 181 荒梅雨の跳ねたる鯉も叩きたり
四宮陽一(京都府)
- 182 またの名を灸花とも言ふことを
杉浦俊雄(静岡県)
- 183 鳥影のみるみる海霧に吞まれけり
平山千江(岩手県)
- 184 玉音放送遠くなりにし敗戦日
田野井一夫(栃木県)
- 185 牛たちの真珠のなみだ梅雨に入る
井田由利子(宮城県)
- 186 天水の村に住み古り田草取る
西村けい(茨城県)
- 187 梅雨晴れや盲導犬のつぶらな目
出井静枝(三重県)
- 188 絶え間なく汗の眼に染む草むしり
北村富士雄(新潟県)
- 189 がん患者見舞ふ窓辺や合歓の花
小野正光(宮城県)
- 190 入り日いま池面を染めて暑さ引く
長谷部喜代子(大阪府)
- 191 見てゐても見えないこともサンングラス
長島保子(東京都)
- 192 一病を養うてをり半夏生
野中信夫(東京都)
- 193 鳥高く飛び雨あがる水無月の
勝田久美(大阪府)
- 194 幼児と棟より眺める遠花火
都築重光(愛知県)

短歌

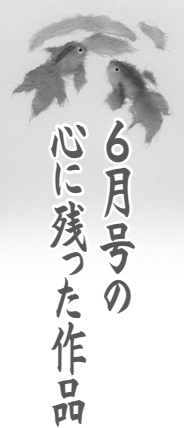
- 195 気がついた空の上から眺めてみたら
短歌をかく人わさわさといふ
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 196 地球儀を地震のたびにまわし見る
島国日本小さきものよ
小島秀雄(福島県)

- 197 亡き母が縫った着物の背がほつれ手直ししつあふるる涙
佐藤佑子(福島県)
- 198 忘れない忘れないよと君は言う確かにそうだ電話に出無い
大川聡(新潟県)
- 199 べんがらの建物みやび広大な当時再現平安城都 高須孝(愛知県)
- 200 わが生命鴻毛よりも軽ろしとて重い銃持つ訓練の夢
百花清(埼玉県)
- 201 大いなる夢と未来を背負いたるいろいろどりの鞆見守る
藤原昭三(滋賀県)
- 202 打ちかえす波の反復光りつつ遠き昔の夢に見し景 北岡晃(兵庫県)
- 203 三日月の上に小さき星ひとつそを見るわれもまたひとり
若月理依子(新潟県)
- 204 きたみなみ出あいわくわく夫と我笑顔ふりまき今を楽しむ
田村淳子(新潟県)
- 205 はやぶさよ苦闘七年イトカワに往復果たすチームを称う
山本敏順(長野県)
- 206 楓若葉のかこむ校庭きらきらと螺嬴少女の動き眩しも
佐藤古城(埼玉県)
- 207 忘れぬし黒い鼻緒の桐の下駄履けば昭和の音が聞こえる
野木宗信(奈良県)
- 208 あの人がこの人がというを聞き集いの輪より遠のきて座す
寒川靖子(香川県)
- 209 ピラカンサの小さき白き花散りて路面に白き光りを放つ
小暮昭司(群馬県)
- 210 車イスに乗せ春播きの種子並ぶ園芸店に父を連れゆく
桑原謙一(群馬県)
- 211 風に逸れて松の枝より戻りくるセーフのボール愛しく打てり
土屋喜雄(山梨県)
- 212 「豆腐屋」も「栗花落」「子鳥遊里」みな名字「六月一日」「さんも」「八月一日」さんも
黒澤正行(福島県)
- 213 うた詠みの元手かなはず晩学に生きる証す八十路へ何苦礎
西山悌三郎(高知県)
- 214 球場の「ウェーブ」のごと新緑の葉裏の波が里山巡る
村瀬憲正(岡山県)
- 215 土蔵よりかくれ切支丹の仏像に卒寿の母は蒼朮を焚く
久保和友(滋賀県)
- 216 吾が生きの節目を支へくれし義兄重なる病を独り闘ふ
吉田ゆき(新潟県)
- 217 萍の花を叩ける梅雨に酌む友の酒は二升を超えぬ
鈴木清美(愛知県)
- 218 八十年前人手に渡しし我が家の透かしの欄間を今日仰ぐとは
今井忠一(東京都)
- 219 やさしさは人を知ること良心と心通わす荅となりぬ
渡辺勇治(埼玉県)
- 220 夏の空見れば長崎原爆の電が降るぞと言いしあの雲
野中良巳(神奈川県)
- 221 蓮池さん拉致ふり返り泌み泌みと「生き伸びたるは愛と絆」と
椎忠夫(神奈川県)
- 222 白寿なる遺品を拝み袖通す水玉模様いぶし銀色 小田佳代(和歌山県)
- 223 齡早や七十七年過ぐる今眼とずればこころ安らぐ
大西敏正(神奈川県)
- 224 別れゆくあなたに背にこれきりとそつとつぶやく「夢」ありがとう
岩崎令子(大阪府)
- 225 中庭の石畳に打ち水や竹騒めきてうなじ触る風
小黒深雪(新潟県)
- 226 もろもろに青葉若葉と萌え初めて緑の中に生きる幸せ
田中豊恵(新潟県)
- 227 車椅子枝垂れ桜に頬寄せし汝のことかと問ひし友逝く
磯部力(新潟県)
- 228 辛うじて生息しおり家の前の沢に螢の二、三匹舞う
浜野タミ(東京都)
- 229 ママ宇宙パパは子守りで空見上げ
石原学(群馬県)
- 230 土に生き飾る事なき妻の指
羽田桐柳(群馬県)
- 231 貫禄を欠く第三のビール腹
大竹和男(新潟県)
- 232 コーヒーを飲んで味う話有り
原田英一(千葉県)
- 233 黒板がないからクラス会は好き
丸山芳夫(東京都)
- 234 弾まない毬を許してやる度量
花井ようこ(神奈川県)
- 235 検診のバリウム採血にビビる
高柳閉雲(愛知県)
- 236 昔むかし先祖が建てた道しるべ
大江秋月(兵庫県)
- 237 泣くもんか愛しい人がたと居る
勢藤隆(群馬県)
- 238 パソコンに縁なくなんでも手書とす
古賀美雪(山口県)
- 239 ひと手間をかけて優しいドクダミ茶
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 240 燃え尽きる瞬間の火の鮮やかさ
竹村穂夫(大阪府)
- 241 誰が揮毫瓦礫の中に定礎石
濱田イサオ(福岡県)
- 242 野に山に光あふれて郷奏える
森本遊笑(兵庫県)
- 243 今日の音わすれて明日のキーボード
鈴木義雄(福島県)
- 244 梅雨晴間詩人にさせる花の園
青木日出男(群馬県)
- 245 若かった頃の私を叱りたい
岡本恵(茨城県)
- 246 ご無沙汰に亡母の催促墓参り
小山恵美子(大阪府)
- 247 節くれた指で刻んだ観世音
木村誠一(神奈川県)
- 248 穴うめに手取り早い消費税
近藤はつみ(福岡県)

川柳



- 249 地球のルーツ知らぬまんまで住む地球 大岩歌子(岡山県)
- 250 策一つない気楽さが難を避け 田澤宏(新潟県)
- 251 参観日衣装比べに早変わり 山崎一嘉(愛媛県)
- 252 定年後無趣味の男歩くだけ 藤沢健二(千葉県)
- 253 供養する心構えを子や孫に 藤井北灯(福岡県)
- 254 ウオーキング元気で歩くけ明日のため 工藤昌見(山形県)
- 255 入園後「熱があるよ」と自己申告 奥那於子(大阪府)
- 256 乗り越えた破れかぶれの口車 藤井碩子(山口県)
- 257 デジタル化時計廻りが死語になる 中島久光(岩手県)
- 258 告げて欲しき言葉もかくすかくれんぼ 安部龍太(山梨県)
- 259 時計台より高い電柱 奈倉楽甫(愛知県)
- 260 爪を切る亡父に似た手の爪を切る 中林恵子(大阪府)
- 261 時たまに妻が打ち出す変化球 鏡たか子(山形県)
- 262 朝顔に水遣り涼しさを貰う喜寿 久本にい地(岡山県)
- 263 今年また元気な証梅を漬け 斎藤和子(新潟県)



6月号の
心に残った作品

毎号募集しております「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございます！
その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

22 咲くを待ち散るを愁ひて花の日々

井原穂子(東京都)

・桜花に関して大方の日本人が持つ感情を端的に表し、桜に対する憧れは今様西行か 百花清(埼玉県)・完璧な句。優雅な境地 居原田連星(大阪府)・老齡の今、咲くを待ち散るを愁ふ」と言う作者に同感 伊藤修敬(三重県)・見事な作品 檜山とり子(東京都)・私も同じ気持ちでしたが俳句になりませんでした 神作洸江(埼玉県)・桜の開花を待ちわび、又散るを惜しむ心情が花の日々に出ている 池本勇(大阪府)・人生観を感じた 藤田君江(東京都)・花の季節になると誰しも思う素直な気持ちが出ている 青木涼子(埼玉県)

【百句自解】

自宅からJR大井町駅まで桜並木があります。固い冬芽を寒風の中見つけた時から、蕾が日一日とふくらむ頃が私の一番好きな桜の時期です。今年の桜は開花から寒い日があり、例

年より長く咲きました。満開の花の下を通る幸せが、やがて散り始めて、桜蕊も降り、ああ今年の桜も終り：と、この句を詠みました。今(夏)は葉桜の木陰、秋は桜紅葉、冬は厳しい裸木、季節の移ろいを我が身に合せて感じている今日この頃です。

6 平均寿命ことなくクリア青き踏む

吉村筑紫(埼玉県)

・この方は男性、私は女性、ことなくが、私の願望 小岩和子(宮城県)・季語が適切で、お元気な様子が浮かびます 藤沢樹村(東京都)・平均寿命もなく過し安堵している。これからも健康で暮して下さい 阿部幸子(宮城県)・我が身もこの方の様でありたい 小田眞佐代(大阪府)・自分もすぐ喜寿に届くころとなりことなくクリアにあやかりたい 静野栄子(埼玉県)・男として全ての人の願望を代表して詠んでくれた 増田信雄(埼玉県)

177 共に泣く介護もありて桃の花

山崎鶴恵(鹿児島県)

・六年間看護して亡くなった主人を思い出しました 古賀美雪(山口県)・切実な思い、わかる内河邦久(東京都)・現代の悲しい現実。桃の花で救われた 岩村昇(神奈川県)・介護の仕事をしているので理解出来る心情 駒場京子(神奈川県)・表現されている事実に感動。「桃の花」が効果的 宮川昭男(高知県)・実感、胸があつくなります 今井温子(奈良県)・5月末に5歳違いの弟が介護も充分受けずに永

眠致しました。桃の花も病院でした。共感が在り涙を誘います 吉野成行(愛知県)・桃の花が咲いて泣きたい気持ち癒してくるが、介護の思いが切々とつたわる 能條憲夫(神奈川県)・老老介護の現代、身にしみる句です 西村けい(茨城県)

113 持てるだけ持ち娘の家へ春野菜

山岸伊久雄(東京都)

・私も変わった物、野菜などを娘へもたせます。やはりお母さんやっているね 杉村美保子(岩手県)・持てるだけ持ちというところに親心を強く感じました。春野菜の新鮮さも 大藪新子(大阪府)・子は宝物。たくさんの収穫野菜がいきてます 北野耕兵(千葉県)・「持てるだけ持ち」は、親の愛情を素直にあらわして、お金で買えない春野菜です 奥那於子(大阪府)・「春野菜」に娘を想う優しさが新鮮に感じて 中山日出子(大阪府)・上五、中七にかけてのあふれる程の親心が伝わります 井田由利子(宮城県) ◎その他にも、こんな作品が挙げられました。

31 畔走る筆箱の音新学期

三津木俊幸(千葉県)

47 あるもので済ます生活や昭和の日

羽根田明(神奈川県)

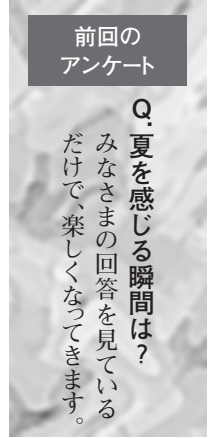
33 初蝶と乗る一湾のたらしひ舟

川口襄(埼玉県)

※今後もふるって投稿をお願いします！

前回のアンケート

Q.夏を感じる瞬間は？
みなさまの回答を見ているだけで、楽しくなっています。



あじさいの花の芽がふくらみかけるとき 石原学／「バス待ちの女匂へり夏の宵」擦れ違いざまにほのかに香水の匂いを残すとき 大橋恒次／日が伸びた時 羽田桐柳／スイカを食べた時セミの声を聞いた時 近藤信一／自転車漕ぎ出した時の強烈な日差し 井原毬子／冷蔵庫から氷を出す時 星野三興／動いたあと心地良い汗に 吉田末灰／涼風がこちよい瞬間 佐瀬チエ子／風鈴の音いろ 神田九十九／庭の雑草がぼうぼうぼう生えた時 梅澤鳳舞／ペランダを水洗いする時 松嶋光秋／千鳥草の紫の小花が咲いて緑の風に揺れている姿を見た時 相馬竹浪／甚平を着て生ビールを飲む一瞬 大竹和男／風薫る、です 千代田栄次／下萌から新緑、万緑で 小岩和子／朝の目覚め「易明」を強く感じる 小島岳青／早朝七千歩ウォーキング達成時の洗顔は一年を通じてどの季節よりも夏を強く感じさせる 有坂馨園／火花をみたり、ソーメンを食べたとき 小島秀雄／茶道で着物が絹になると夏なのねと感じまた茶器で季節を感じます 佐藤佑子／クーラーを点け始めた時 大川聡／我が家の近くの区営プールが賑わい始める時 三ツ木宗一／ビールを呑む時 請問邦俊／庭の池にスイレンの白い花がたくさん咲いてきた朝池をよぎる風の匂いに夏を感じました 竹本惇子／汗疹に熱い湯がしみる時 丸山芳夫／Tシャツを着るようになる頃 忍正志／家族揃った夕食時、冷えたビールで乾杯!!

友人と乾杯!! 花井ようこ／湧き立つ白銀の入道雲を見るととき 百花清／ストアで長目の買い物をした後、冷えた体で外に出た瞬間 吉野香苗／裸足で庭に水まきする時 大場きよし／長良川の鵜飼 浜田蛙城／「生ビールがうまいぜ!」と思う時 高柳閑雲／太陽の輝き 大谷茂／縁先で西瓜を食べるとき 大江秋月／万緑が明るく太陽を受け輝いた一日 油谷郷史／強い「日差し」を浴びた時 佐野和彦／万緑の溪流に尺岩魚を求めて釣竿を伸ばす時 井上静夫／家内が好物のスイカを食べる時 勢藤隆／更衣と軒にスタレを吊るしたとき。外出に麦藁帽を被るとき 藤原昭三／炎天下の下、汗をかいたあと、冷たいビールを飲んだ時 竹内進／ひやりと水に手を触れたとき 北岡晃／入道雲ひまわり、掻き氷 佐野しづ子／扇風機の必要となる時期がもう夏なのかと暖房具と入れ替えます 浦橋渴雪／デパートの売り場にカラフルな水着が並んだ時 小林七重／「十全なす」のなす漬けを食べたとき 若月依子／汗、炎天、蝉 瞬間ではないが、夏を感じる私の句の中には最も多く登場する 辻升人／緑陰の下に居る時 稲葉民雄／青空に入道雲 田村淳子／朝六時起床、二階から眺める空と山の気を受け 須澤重雄／西瓜にかぶりつく時 山本敏順／岩清水を手にくくつて飲んだ時 居原田連星／Tシャツ一枚でいて気持ちのよい時 北海道ではTシャツ一枚でいられる期間は短い 梶鴻風／到る所女性の涼しげな服装と匂いたつ様にきれいなお肌が溢れ始める時。男性も元気を貰います 佐藤古城／田に代掻が始まる頃、蛙が見つかる頃、私は冬が嫌い。夏がくるのを待ちのぞんでいます 野木宗信／高校生の野球で各県の代表が日本一の栄冠に輝く、甲子園大会の八月に 松尾

正一／「氷」と書かれているのれんや幟を見た時 布目雅之／輝やく白い雲を見て「予科練の夢を育てし夏の雲」 吉村筑紫／今は夕涼みです ね 津田忠彦／梅雨明けに入道雲の湧きころ 坪田勝秀／庭でテールを出しビールを飲む時 湯浅芳郎／ほととぎすの声 千葉すむ／夜明けの美しさ、空の彩 寒川靖子／冷水の喉越し 石井美智子／樹々の濃き緑!! 小暮昭司／四六時仰ぐ霊峰八海に白い入道雲が俄かにわきあがる時 井口武重／室積湾に大火花が上るとき 古賀美雪／緑陰のベンチか涼む台にねころがって好きな本を読む時。蝉しぐれの晩夏も好き 鈴木岑夫／万緑が太陽に輝いている時 清水喜代子／汗を流した後に冷えたビールを飲むとき 桑原謙一／蚊の出現です。我が家のとなりは敷なので、どこよりも早く、しかも大量に蚊が発生します 今井勝子／吹く風が心地よく感じるとき 堀田寿美子／散歩(毎朝する)の帰り額に汗を感じた時 山本直子／笛吹川に懸かった夕方の虹、雨が去った後ですね 土屋喜雄／自宅の庭に夏椿の白い花が咲き初めるのを見た 北嶋八重／ゴーヤの蔓が日増しに伸びてネットにからみつてきました 中嶋秀次郎／冷しソーメンがおいしくなった時本当の夏がきたと感じます 村松知津子／素足で下駄をはく時 竹村穂夫／海に行つた時 長尾俊彦／一番草を刈つた時 寺岡文生／螢が飛び始めた時 濱田イサオ／庭の春花のかたづけをして汗をかいた時 佐伯セツ子／入道雲、西瓜、枝豆、ビールといった所でしょいか? 渡邊昭雄／目の前に藩山と云う山があります。新緑から緑が深くなつて行くのを見る時です 副島加代子／初郭公初ほととぎすを聞いて 黒澤正行／甚兵衛(衣)、冷麦(食)、麻のれん(住) 田中昶／女性の羅を

感じたとき 磯村鉄夫／セミがいつせいに鳴きはじめてとき 藤本由美子／羽しろき花群れ 近く野辺母の精そよ吹く風に山ほふし揺らふ :と 西山悌三郎／埋立てにより遠くなった海(大阪湾)から夕風に乗って潮の香磯の香が運ばれて来る時 堀木和子／碧空に盛り上る積乱雲の白さ 矢野絹枝／愛犬の息づかい。積乱雲、下校の児の足どり 吉澤八千代／歳時記の分冊を「夏」に替える時 村瀬憲正／蝉の声ーと言いつつ、実はわが耳奥には年中蝉が鳴いてます 森本遊笑／琵琶湖畔の水泳場ですつ裸で松林の下で昼寝して真赤な西瓜を割ること 久保和友／各地で螢が飛んで来たよと話題になる時。知多地方は六月中旬ごろです 中村和弘／太陽が昇る、沈む時、太陽が大きくかがやいている 杉村美保子／海に落ちる夕焼のとき 菊池シユン／虫刺され、かっこうの声、蛇に出会う、冷奴を食べた時 鈴木義雄／熊谷、館林、太田市は南に利根川(熊谷は北に)北に渡良瀬川、太陽の光でぐらぐらする気温、記録的であります 青木日出男／「太陽」を見たとき 安木沢修風／蝉の高い声の鳴き声 五味田幸夫／長袖のシャツを袖まくりをした時 小林正男／庭の沙羅の花が咲き出した時 竹内ハヤ子／アイスコーヒーが喉を通るとき 藤沢樹村／冷たい物がおいしくなったとき、麦わら帽子をかぶりたくなつたとき 岡本恵／家の四囲に蝉時雨が旺んな時 田島星景子／自分の汗、他の人の汗 福岡悟／我家の隅にある卵の花が真っ白な花を着ける時期に我が脳裏には童謡「卵の花の匂う垣根に」のメロディが流れます。私の本格的夏のはじまり 村木尚／鉦路に住んで居て、蝉のはげしい声が聞ける瞬間 高杉杜詩花／田植えが終り蛙の音が賑やかになる時、公園で小さい子が裸で水遊びを始めたら

A Q U E S T I O N N A I R E

小山恵美子／ビールのおいしさ 重原昇／郭公が一声私の頭上を鳴いて行った時 山川みど利／朝顔市、鬼灯市に 寺尾令子／夏祭り実行委員会の発足 木村誠一／夕立 諏訪杜夫／散歩のあとのビールがのどを通る瞬間 長峰正晴／更衣、半袖になった時、家中の窓を明け放つ時 大窪美代子／川まつり。筑後川の花火すてきですよ 近藤はつみ／庭のニイニイ蟬が鳴く時 大岩歌子／吹き出る汗。積乱雲 津布久信雄／セミの鳴き声 阿部澄江／体感が涼を求める時 早川述史／じりじりと太陽が照りつけ、朝からぐんぐんと気温が上昇するとき 田澤宏／端居して一人しみじみ涼を楽しんでる時 阿部幸子／風と雲 石田福子／むくむくとのはる雲の峰を見た時 大藪新子／冷えたビールが飲みたくなる瞬間 岡弘子／外出の時は強い日差しを避け、日陰をさがす。家ではクーラー扇風機つける 大久保アヤ子／うたた寝を蚊の羽音で起こされる時、その後全神経を耳に集中すること 藤沢健二／冷えたスイカをほおばった時 針生清／かき氷が急に喰べたくなる頃です 羽根田明／雷雨の感触 谷川利子／外出後手を洗っていて、日焼けしている我が手に気づいたとき 望月よし江／汗：顔中にかけて暑いのは苦手。花火：家族そろって又来年もと祈りつつ 大橋絵代／蝉時雨、冷そう麺など食べた時 内河邦久／汗が止めもなく出る時 岩村昇／アーティチョークの実るとき 大井光隆／近くの川の堤を歩いているといろいろな野草が両側に生えその勢いが日に日に増して道幅を狭くする時 勢川直美／庭に蜜袋の咲き乱れる頃 本間七窪子／シャワー浴びて涼を感じた時 駒場京子／南国の太陽がカッと照りつける時 宮川昭男／沢山汗をかいた時 廣瀬喜代子／紫陽花が開く頃 五十嵐勝敏／風鈴の音色は心地よくストレートに夏を感じます 浅倉里水／冷しソーメンがおいしいと思う時 今井温子／ビールが

うまかったとき 炭崎博／尾瀬の水芭蕉が咲いた時。更衣した時。百合。花ショウブ 宇田川正雄／紫陽花の青が目に入つて来ると、雨でも晴でも、夏だなあとと思う 吉田ゆき／「いと軽く洗い晒の古浴衣」を感じる時 磯山陽吉／朝檜山とり子／ギラギラの太陽と稲穂のかおり 北野耕兵／学生服の更衣 上谷すみゑ／涼やかな風鈴の音 佐藤茂三郎／高校野球 小野寺裕子／庭の蟬が声の嵐を呼び出すとき 鈴木清美／強い日差しと汗 小田眞佐代／陶淵明の詩に「夏雲多奇峰」とある。入道雲をみた時、その壮大な雄姿がよい。少年の大意抱けり雲の峰 針ヶ谷里三／熱帯が好きだが、冷酒を飲みたくなった時 仁藤ひろじ／いつも冷たいものは苦手なのに急に「水あづき」が食べたくなつた時 秋谷静子／夏休み夏休みと世間で言っている時、夏を感じますが修行に夏はないのでは？ 神作洸江／夕立 松木建二／西瓜を食べる時 林あみ子／風鈴で足りず団扇で夏終えり 工藤昌見／カッツとした青空 木下精／女性が薄着になつて美しく見えた時 堀井酔人／ツバメが低空飛行し、軒下に巣を見つけた時 奥那於子／つばめが飛び交い軒に巣を作り親鳥が餌をせつせと運ぶ姿を眺める時 棚橋麗未／湯上りに晒しの越中褌をしめて生ビールのジョッキをかたむけると、齊藤安弘／いちじくの青い小さい実をみつけた時 藤井碩子／外出の際の暑さの度合 今井忠一／暑くて熟睡出来ない時 福田和子／海水に肩まで浸かったとき。海辺まで七七八分の地に住んでいるが、次第に海水浴の機会が減り、海に泳ぐこの瞬間である 菅井文男／入道雲を見ると 小山たけし／遠道を歩いて帰った時背に汗がにじみ出た時 村上千代／入道雲がもくもく出る時 梅津陽子／女の人が街を歩いていて、綺麗な肌を見た時。ステベですみません：エへ 渡辺勇治／雑木山が青葉になったとき。

て「青葉」になる 野中良巳／新緑、風、日傘 小田佳代／ノースリーブの若い女性が、街を闊歩してゆくのを見る時 萬濃その子／やまなみ雨はない。その先に梅雨明けのようなまぶしい季節がキラキラと待っているはずだ。喊声上げて蟬が鳴き出す 吉野成行／孫が庭で水遊びの喚声を上げる時 中島久光／「おへそ取られるわよ。」と昔叱りつけられた瞬間 大西敏正／初めて入道雲を見た時 山岸伊久雄／「草いきれに夏を感じます。草の生命力。草たちも元気で生きているのですネ 鈴木蝶次／汗を出して働いた後の冷えたビールで乾杯する時 神一男／海開き、山開きの声を聞いたとき 岡村君枝／蚊に刺された時 堀たかこ／衣替え 石崎好文／登山時 鈴木与平／帽子をとった時に感じる風 木村真澄／田舎から西瓜が届いた時 田中敏晴／野良から帰って冷蔵庫の中にある缶コーヒを飲んで胸がスツツとしたとき 延原令岱／雲の形、その動きに 山崎鶴恵／冷し素麺の喉越しのよさ、そんなときかな？ 池本勇／家事をしつつ顔より滴り落ちる汗をタオルで拭うとき 大阿久雅子／かき水の一口目 中林恵子／昨年終い忘れた風鈴がとっぜんなり出しさわやかな風を体感する時 岩崎令子／少しでも暑いともう夏だ、と思つてしまふ 村上幸枝／西瓜を煮詰めて西瓜糖を作る時ととも長い暑い一日ですよ 藤田君江／ゲートボールの練習を終え、ジョッキに500ccをいっきに飲み干すとき 森崎榮久／街を歩いていて「冷やし中華始めましたの貼り紙を見た時 紺谷睡花／夜の虫 高松ゆか／雷鳴り、夕立 鏡たか子／窓より入る風特（に朝） 増田信雄／生ビールをグイッと飲む時 久本に地／花火の音：家からでられないので音を楽しんでいます 小黒深雪／色彩、まぶしい色々 青木凉子／風鈴の音、蟬の声、特に鯛かん高いカナカナの声 田中豊恵／羅や日傘等を目にした時。暑くても夏は好きです 大

下志峰／海、山開き、納涼花火大会 藤田照代／庭の牡丹の咲き初めた時 吉澤昌美／外出から帰り冷房の効いた部屋に一歩足を踏み入れた瞬間かな？ 要俊江／何と言つても空の色、風の色を感じるとき 池田岬／夏が大の苦手なので日光がキラキラからギラギラになつてくるとこたえます 増本和子／セミの声を聞いたとき 石川郁子／毎年六月五日京都宇治の県祭りに行きます。妹と宇治橋の上から川の流れを見ながら今年も夏が来た顔を見合わせる時、中山日出子／庭木の手入れやパーベキユーなど思いきり汗を流せる時 佐藤信／風呂から上りビールを飲んだとき 関口修一／赤色のでいこの花が咲きはじめた時 古谷力／新潟の海岸に立つ時 中野博夫／緑陰 新井竜才／風鈴の音色 三浦八千代／日盛りの中、自販機のサイターをクビクビ飲む時 四宮陽一／いつもは裏山にうるさいくらい鳴く蟬が今年はまだなのです 浜野タミ／初蟬の声を耳にした時 杉浦俊雄／入道雲でしようかな 平山千江／日盛りに木陰で聞く油蟬の声 田野井一夫／油ゼミのじいじやかましい程の声を聞いた時 斎藤和子／ミンミン蟬の合唄が始まった時や風鈴の音色をききたくなる頃 井田由利子／女子高生の白いソックスに 西村けい／畑の草引きに追われる頃、でも丹精した西瓜は最高に甘くて美味しい 出井静枝／庭の雑草のうんざりするほどのつよさ 北村富士雄／ひまわりが咲いているのを見た時 小野正光／植物旺盛なこと、雑草がすぐぬいても伸びること 長島保子／「新緑の窓に休らふ山雨かな」野中信夫／曇りを感じる。汗ばむところ。風鈴の音いろがいがやしてくれるとき 勝田久美／初めてかすかに夏蟬の声を聞きとめた時 行本昭子／遠花火を見るとき 都築重光



ポストカード5名様に 全シリーズをプレゼント!!

当選者決定

ご好評をいただいております弊社のオリジナルポストカード。春夏秋冬全シリーズ(各8枚×4シリーズ=32枚)が揃ったことを受け、日頃のご愛顧に感謝し5名の方に全シリーズをプレゼントさせていただきました。

大場きよし様／高杉杜詩花様／福岡悟様／
萬濃その子様／安江幸子様

なお、夏・秋シリーズを引き続き発売中ですので、同封のアンケート用紙にご記入のうえ、必要金額分の切手と一緒に封書にてお申込みください。

夏…貝殻、矢車菊・カスミノソウ、ラベンダー・カモミール、
ダリア、ワスレナグサ・シレネ、リキュールボンボン、
朝顔、ブルーベリー

秋…松ぼっくり、エスプレッソマシーン、くるみ、ほおずき、
きのこ、野ぶどう、コスモス、紅葉



簾戸をイメージした俳句 大賞決定

先回の6月号でご紹介した新潟県・新発田市榎高橋建具製作所様が募集した「簾戸をイメージした俳句」。おかげさまで「喜怒哀楽」に掲載後、たくさんのご応募をいただいたと担当の五十嵐様よりお喜びいただきました。栄えある大賞は、本紙にも時々ご登場いただいております福岡県の濱田イサオ様の作品。

簾戸越しにせせらぎ聞こゆ夏料理

これから、濱田様には大賞商品である簾戸の衝立が贈られるそうです。読者の皆さまのご協力で改めて感謝いたします。



「ご縁ブック2010」「2011年手帖」

7/31(土)締切の「ご縁ブック2010」「2011年手帖」に、今年も多くのご投稿をいただきありがとうございました。ご縁ブックは12月上旬に、手帳は11月初旬を目処にお送りする予定です。「2010年手帖」は作品の投稿は締切りでしたが、購入のご希望は受付けております。今年の色は「えんじ」。弊社オリジナルの手帖をぜひお手元に!



50号御礼

先回の喜怒哀楽6月号(50号)に対し、本当に大勢の皆さまより、お祝いや励ましのお言葉を頂戴いたしました。お読みくださりご投稿くださる皆さまのおかげで成り立っている「喜怒哀楽」そして弊社だと、改めて思った次第です。引き続き、貴重なお声をお待ちしております。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



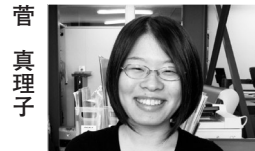
Q. 夏を感じる瞬間は?



プール道具を持った小学生を見たとき、上腕に種痘の痕を見たとき、スイカを食べたとき。先日、今年の初物を食べた愚娘は「カブトムシの味がする」…と。食べたことあるんかい!



どしゃぶりの雨の中にも、すぐに「寒い!」と思わなくなったとき。その後、冷房の効いたところにいたりして、寒くなったりするんですけどね……。



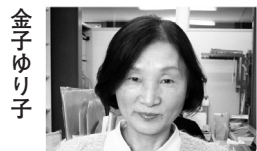
冷えたバスから降り、めがねが曇った瞬間。甲子園のための番組編成変更。夜に外で長々と立ち話ができるのも、夏ならでは。



入道雲を見たとき。子供の頃は夏になると1日中外で遊んでいました。水風船を投げあったり、昼間から花火をしたり…。今の自分にはとてもできないことですが、入道雲を見るとあの頃が懐しく思い出されます。



梅雨があけて、綺麗な青空と白い雲を見た時。普段見なれた景色も輝いて、その美しさに感動。百日紅の花、公園の木陰、我が家の練乳たっぷりのかき氷、冷たいビールに岩牡蠣。



青い空、照りつける太陽。畑の胡瓜・茄子・トマトが食べられるようになったとき。家の前で汗をかきながら団扇を持ち、バーベキューを頻繁にするときにあぁ一夏だと思ふ。



小学校から「お便り6月号」をもらったとき(5月末)。「水泳道具用意で」ああ今年も夏がやってくるなあ…」と思います。ちなみに主人と息子は児童、私と娘はかなづちです。



お洗濯を取り込んだ時、タオルケット等の大物も一日でパリッと乾いているのがうれしい。洗剤のCMみたいに干しあがった洗濯物にムフッと顔を沈めてお日様の匂いをかぐとっつりします。



蝉が鳴いたとき、海へ行ったり花火をしたとき。スーパーで桃やスイカを見たとき。今年はカブトムシが我が家にやってきました。吉田家は夏真っ盛りです!

●お客様の「リレーエッセイ」

高崎山、阿蘇の車窓風景

山形誠司

最近では鉄道の車窓風景を眺めるのに凝っており、毎月日本各地のローカル路線に乗りに出かけている。先日は九州、大分の別府から阿蘇、熊本、人吉、吉松を経由して鹿児島島の枕崎までの車窓旅行を試みた。道中は、いつもながら予想外の発見の連続となった。

鉄道旅行でまず念頭におかなければならないことは、車窓風景に過度の期待をしてはならない、という点である。今でこそ展望列車が走っていたり、在来線でも観光用の列車が用意され、景色のいい場所で一時停止するサービスまでなされているが、元来鉄道は効率よく物資を運ぶことを目的として建設されたものであり、物好きな乗客向けに車外の景色を楽しませることは想定していない。当然好い風景の場所は限定されている。だから事前に予備知識を仕入れておかないと、絶景地点を見逃してしまうことになる。そこで私は、ここぞ、と思われる部分では列車を降りて風景の点検をしている。

今回は大分の別府から「九州横断特急」に乗る前に、まず別府北浜の海岸遊歩道を歩いた。ホテル街先端の人工海岸上に作られた道だが、なかなか眺望が優れている。小雨模様ながら、国東半島のなだらかな山々がくっきりと見えていた。ここを歩く最大の目的は、日豊本線が山裾を通る「瀬戸内海国立公園」の飛び地・高崎山を眺めることにあった。サル山のイメージが先行していることは高崎山にとって不運である。国立公園に指定されたのは、火山に由来する姿の美しさと頂上からの眺望の好さが評価されたからである。別府北浜から見る高崎山は清々しさが漲っている。辺りの山と異なる急峻な輪郭は青々とした樹木に覆わ

れ、和らか味を帯びている。

緑冴ゆ高崎山に春の雨

こうして全体像を把握した後で列車に乗ると、あっけなく通り過ぎただけ、とならずに、今どの位置を走っているのか、鮮明に思い返すことができる。

この後豊肥本線で阿蘇カルデラに入り、南郷谷(阿蘇の南側の谷・白川の流域)の高森で一泊した。阿蘇は9万年前に世界最大の噴火に伴って陥没した大カルデラといわれる。そこを横断する豊肥本線は雄大な車窓風景を満喫させてくれる路線として人気がある。しかし、額面通り受け取ってはならない。阿蘇山中の年間降水量は三〇〇〇ミリを超え、悪天候に遭遇する日も多いのである。雨や曇りの時、外輪山や中央に聳える阿蘇五岳が隠れてしまうと豪快さは消え、いたって平凡な景色になってしまう。むしろ野焼きの影響で出来た殺風景な草山ばかりが目立って、がっかりさせられることにもなりかねない。しかしこうした雨や曇りの天候の中にも、阿蘇特有の風情が隠されているのである。車窓からそれを見つけるのが、エッセイストに課せられた使命である。

阿蘇を訪ねたその日は雨で全く遠望できなかった。翌日も少々晴れ間が覗くものの季節外れの寒気がやってきたせいで、いかにも冷たそうな雲が五岳を閉ざしてしまふ。今回こういう天候の中、豪快でも破壊的でもない、絶妙な自然の芸術と出会うことができた。雲が動き一瞬山々がうっすらと全容を顕した時、この世界最大の噴火の山々があえかな彩りに満たされていることに気付いた。激しい起伏の尾根筋が見事に霧氷に覆われていたのである。阿蘇には珍しい冬の名残の風情を惜しみながら車窓旅行を続けた。

霧氷呼ぶ阿蘇の凍雲峰幽か



新潟ぶらり

＊現代司酒造株式会社

新潟市中央区沼垂

沼垂。ぬつたり、と読む。新潟市中央区、信濃川の河口にあたる地域で、旧栗ノ木川沿いに醸造業の店が立ち並び発酵食品のまちである。酒、味噌、醤油、納豆。私の好きなものばかりだ。そのなかで今回訪れたのは、純米酒を誇る、現代司酒造株式会社。その日はとても暑かったが、酒蔵に入ると、ひんやりとしていて気持ちがいい。予約をして行くと、純米酒ができるまでをていねいに説明してくれ、見学の後には試飲もできる。

現代司酒造株式会社は、明治中期から沼垂で日本酒造りをはじめた。この地を選んだのは、当時新潟港に通じる水運の幹線であった栗ノ木川に面し、船で荷物の運搬ができたこと、そして良質の天然水がとれたからだという。

新潟の夏は、暑い。冬寒いのだから、夏くらい涼しくあつてほしいと思うが、これが発酵食品の製造には適している。夏の暑さが発酵を助け、冬の寒さが雑菌の繁殖をおさえるというのだ。そう聞くと、この暑さも、あの寒さも、なんだか甲斐があったような気になる。

暑い夏には、冷酒がうれしい。酒を冷やす表現に、雪冷え、花冷え、涼冷



えというのがある（順に、五度、十度、十五度）。とても雅な感じがする。一緒に冷酒の句も調べてみた。帰りに居酒屋に寄つて、くいつと一杯！というようなカラツとした句が多いかな、などと予想していたが、少し物憂さを感じさせる句もあるようだ。冷酒をいただくときというのは、昼間の暑さ、外の世界から少し離れて、ゆつくりと涼みながら自分の世界に入るとき…なのかもしれない。

長き憂き一日なりけり冷し酒

若月瑞峰

（菅真理子）



▲杉玉も茶色になって暑そう…

▼「花柳界」など新潟らしい名前酒も



住／新潟市中央区鏡が岡一番一号
☎／025-245-3231

＊西大畑公園

昔、新潟では堀が生活の大きな役割を果たしていた。商いの小船が行き交ったり、橋の上で盆踊りも踊られていた。新潟を訪れた多くの歌人はこの堀と柳を詠っている。

西大畑公園には、かつての堀と柳が再現されている。夏真盛りの日曜日、広場では子ども達が歓声をあげてボール遊びをしたり、丘の上では外国の方を含めた団体がゲームをしたり、東屋では静かに会話をする若者がいたり、それぞれに楽しむ姿が見られた。

公園内には堀や柳、丘などが見事な風景をつくっている他、色、形の斬新な遊具も設置されている。大きなカメラをかまえて写真撮影される方もいた。

この場所にはかつて新潟刑務所があり、隣接する老舗高級料亭との間を通る道は「地獄極楽小路」と呼ばれているようだ。刑務所が移転して、跡地に公



園が整備された。今も新潟刑務所の面影が所々に残されている。刑務所を囲っていた煉瓦塀、「地獄極楽小路」側には、通用門の模型が残され、他の公園にはない独特の雰囲気をつくっている。

柳散る 秋の西堀東堀

さびしきころよ 恋のみなとも

佐渡出身の山田花作（穀城）の歌碑



が、西大畑公園に建てられている。山田花作は新潟で和歌革新運動を起し文学の普及につとめたほか、ジャーナリストとしても活躍した。安吾の父、坂口仁一郎に文才を認められて新潟新聞の主筆となり、新潟を訪れた文人の取材記事を書いた。応対した文人は、尾崎紅葉、北原白秋、吉井勇等。碑は、公園の堀と柳を背景にして建つ。北原白秋が描いた花作の似顔絵が、何かじつと考えているような表情で刻まれている。

（仲由真実）

住／新潟市中央区西大畑町

わからない場所

森賀まり

今回からご執筆いただくのは、薬科大学卒業という経歴をお持ちで姉は歌人の坂原八津さん、夫は俳人の田中裕明さんという若手俳人の森賀まりさん。どんなお話が聞けるのか、3回にわたりぜひお楽しみください。

「詩ってどうやって終わるの。」

と訊ねたのは年長の歌人だった。そのとき大学生だった私は、当時俳句ではなく詩を書いてきた。

「一行ずつ書いているうちに終わりが見えてくるんです。」不思議なことに自分の答えもよく記憶している。

始まりの一節が浮かぶと、そこから詩が始まるようにする。紙の上に書かれた言葉が次の展開を探している。

一行また一行。いくらか進んだら、少し先にふつとたどりつくべき終わりが見えてくる。あとはそこに向かって書いてゆくだけだ。

あのころ書きたかったことは何だったのだろうか。書きたいものがあると思っていた。感情が沸いてきて心が騒いでどうしようもない。そういうときは必ず鉛筆を持った。

意味をたどりながら書きたいと思うものの中心を狙っても、それは必ずどこかの外れていて、これは違うと感じた。だから自分でも見えないままにして手探りのように進む。言葉に呼ばれつつ少しずつ進んでいくと、いつしか心が静まってくる。氷の真中を踏まないように歩くような、その緊張に夢中になった。

近ごろ、振り回して伏せた捕虫網を後から確かめるようだと自分の俳句の作り方をふと顧みる。そして全く違うように思えるのに、次の言葉を探す行程が、詩を書いていたころと遠くなく感じる。

俳句は目の前のモノを描写するに適した詩型である。だが、私を俳句の世界へ深く導いた人たちは、そういう眼前の描写だけを手段とはしなかった。

炉に一夜あと西東夏木立

宇佐美魚目

白粉花吾子は淋しい子かも知れず

波多野爽波

一句目の張りつめた出会いと折り畳まれた時間。拡散しようとするものを夏木立の透明感が鎮めている。二句目の白粉花の懐かしさとそれに続く繊細な展開。夕暮れのさびしさが伝わってくる。

俳句はどうやって終わるのだろうか、とは誰も問わない。だけどむかし詩を書くことで夢中になった言葉を探す緊張が、たった十七字の俳句の中に確かにある。そしてわからないものはわからないままに書く。その方がきつと私自身さえ気づかない場所に近づいているだろう。



●プロフィール

昭和35年愛媛県生まれ。波多野爽波、大串章に師事。「青」のほか、「水無瀬野」「ゆう」に参加。現在「百鳥」同人、「静かな場所」代表。句集に『ねむる手』『瞬く』。詩集「河へ」。田中裕明との共著『癒しの一句』。第三十三回俳人協会新人賞を受賞。



2010. 8. vol.51 (2010年8月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社 ミューズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

☎ 0120-819-395

喜怒哀楽書房

株式会社 ミューズ・コーポレーション

e-mail odp@eseihon.com / HP <http://www.eseihon.com>

編集後記

市販の「なつかし味のババロア」なるものを高3の娘が食べた瞬間「菜々美ちゃんのおばあちゃんの味だ！あ〜懐かしくて涙が出そう」と。早速菜々美ちゃんの母にメールをすると「今日母に会うから伝えたらきっと喜ぶと思う」と返信。17歳でも一つの味に喚起される記憶、そのこと以上に10年を経て自分に返ってくる施しもあることに感じ入る。自分と周囲のことで精一杯、未だにしてもらうことの多い日々。意図しなくても、巡り巡って誰かの記憶に触れる…。こんなさりげない行いができたらいいな、とジリジリした夏にしみじみ思うのでした。(木戸敦子)